

● シリーズ 私の見た日本 Vol.234

墓地から見る「死と生」への向き合い方

袁 嘉悦 (エン カエツ)

2000年中国・内モンゴル生まれ。2023年同済大学建築学の学士号を取得。同年、東京工業大学建築学科塩崎研究室に所属し、現在は建築語彙に関する研究を行っている。個人的な興味は純文学の小説と散歩である



「日本人はお墓参りが好きだね」。先生は、私と肩を並べて寺院の境内を歩きながら、ふとこう語りかけた。

昨年の三月、私たちの大学院では、留学生向けの日本古建築巡りが催され、先生がその引率役を務めてくださった。ちょうどその頃、京都は早春の雨に煙り、霧雨が寺院の屋根や庭石を静かに濡らしていた。淡くけぶる風景の中で、日本の寺と中国の寺の輪郭が徐々に溶け合い、私の心の中でその境界は曖昧になっていった。ただ、一つだけ、はっきりと浮かび上がった違いがあった。それは、中国の寺には林立する墓石が存在せず、ましてや都市の中心に位置することは稀だということだった。

思えば、私はかなり早い段階から、日本と中国の墓地におけるこの微妙な違いに気付いてい

た。きっかけは、来日直前、東京で部屋探しをしていたときのことだ。その物件が、広い墓地のすぐ隣にあると知り、思わず戸惑いを覚えた。都市の真ん中にこれほど多くの墓地があり、それが住宅と何の隔たりもなく並んでいる光景は、私には新鮮というより、驚きだった。この感覚は、おそらく中国人としての文化的な感覚や、日常生活に染みついた習慣がもたらしたものだっただろう。

私の目には、中国人が「墓地」や「死」あるいは「死者の世界」に向き合う態度は、相反しつつも奇妙に共存する二つの思想に要約される。一つは「事死者、如事生」——死者を敬うことは、生者に仕えるのと同様に丁重でなければならないという考え方だ。祖先や亡き人々に対して、生きているかのように心を込めて接し、墓の手入れや墓参りを決して怠ってはならないという教えで

ある。もう一つは、「子不語怪力乱神」——怪異や霊的なものに口をつぐむという態度であり、死や墓に対してどこか距離を置き、避ける傾向がある。実際、中国では墓地は住宅地から遠く離れた場所に設けられるのが一般的で、村外れや都市の郊外がその定位置だ。さらに、近代以降の左翼思想による革命運動によって、死や墓地は宗教や日常生活からますます遠ざけられ、都市空間からも排除されていった。

その点、日本は対照的な景色を見せる。しばしば言われるように、「日本人の人生は神社で始まり、寺で終わる」。宗教、日常、死——この三つの要素が、まるで寄り添うように近い距離にある。東京都内の地図を広げてみても、墓地と住宅地はほとんど境目なく入り混じり、むしろ調和を保ちながら共存していることが分かる。

もちろん、これには歴史的な背景がある。少し

調べると、江戸時代、幕府は寺請制度によってすべての庶民を寺院に所属させ、寺は宗教的儀礼だけでなく、戸籍管理の役割も担っていた。墓地は寺の境内に設けられ、そこは生活と死が隣り合う場所だった。都市の膨張とともに、かつて郊外だった墓地は次第に市街地に取り込まれていった。しかし、日本人はこれに対して特段の忌避感を抱かず、むしろ日常の一部として自然に受け入れてきたように見える。

私が興味を持ち、さらに関わる論文を調べてみると、日本の墓地は運営主体によって「公営型」（国や自治体）、「寺院型」（寺院の敷地内）、そして「事業型」（宗教法人や民間企業）に分類されることが分かった。例えば、東京都の場合、公営墓地はわずかに四カ所に過ぎないが、事業型は七十二カ所、寺院型は千六百七十四カ所にも上る。一方、北京市の墓地は、二〇二四年末時点でわずか六十八カ所。その大半は公営の広大な霊園で、郊外に広がる集約型だ。この数字を比べるだけでも、社会制度や歴史の違いが、都市における墓地の数や形態に色濃く影響していることがうかがえる。

地理的な分布に目を移すと、東京では台東区、足立区、港区、葛飾区に墓地が多く、これらの区は寺院の数が多いこととも関係している。特に、港区や新宿区、板橋区では事業型墓地が目立ち、電車内や街頭では「宗教不問」を掲げる墓地の広告が頻繁に目に入る。小平市には多摩霊園という都営の大規模墓地があり、都市の喧騒を離れた静謐な空間として、多くの都民に親しまれている。それに対して、北京市の墓地は、有名人が眠る墓地を除けば、ほとんどが昌平区や石景山区、その他の郊外に集中している。そのため、中国人にとって墓参りは、時間と労力を要する行為であり、都市部でも農村でも、ほとんどが車での移動を前提としている。加えて、墓参りは家族単位の行事であり、社会的な意味合いも強い。

日本では今もなお、お盆や春秋の彼岸の折に、家族そろって墓参りに出かける習慣が根強く残っている。墓前には季節の花や、故人が生前好ん

だ菓子や酒が供えられ、線香が焚かれ、手が静かに合わせられる。その行為は単なる宗教儀礼ではなく、亡き人との心の対話の場であり、家族の絆を再確認するひとときでもある。遠く離れた実家の墓に、毎年欠かさず帰省する人が多いと聞き、私はそこに、死者を通じて今の自分を見つめ直す日本人の姿を垣間見た気がした。もっとも、近年では日本の墓地事情も変化の兆しを見せている。少子化、核家族化、そして都市生活者のライフスタイルの変化を背景に、伝統的な家墓に代わり、樹木葬や納骨堂、さらには海や山への散骨といった新しい供養の形が広がりつつある。「お墓を持たない」という選択肢が、特に都市部で支持を集めているのだ。こうした動きは、死と生活空間の距離が近いという日本特有の文化が、現代においても柔軟に変化しながら息づいていることを物語っている。

実際、港区の青山霊園は、桜の名所としても知られ、春になると墓地を訪れる人々の中に、墓参者に交じって花見客が加わる。新宿の一角には、ビル群の谷間にひっそりとたたずむ小さな墓地があり、昼休みにサラリーマンがベンチで弁当を広げる姿も見られる。これらの光景は、死と生が日常の中で交錯し、溶け合う日本独特の都市風景だ。思えば、かつて墓地に隣接する住宅に戸惑いを覚えた私自身も、今ではその感覚が徐々に変わ

りつつある。寺の境内を散策し、静けさのなかに佇む墓石群を眺めるうちに、それらが単なる「死」の象徴ではなく、生者の日常の風景の一部として、静かに息づいていることに気づいたのだ。都市のざわめきのなかでふと立ち止まり、過去や死に思いを馳せる時間。それは、現代人にとって、かえって贅沢な「間」なのかもしれない。さらに、都市計画の観点から見ても、日本の墓地は都市における貴重な「余白」として機能している。高密度でせわしない都市空間にあって、墓地は静寂で、人々に安らぎをもたらす場となっている。その意味で、墓地は単なる死者のための場所ではなく、生者が心を整え、都市のリズムから一時的に解き放たれる場所でもあるのだろうかと思っている。

墓地は、生者のために存在する空間だ。その存在を都市から切り離すべきではないし、ましてや忌避すべきものとして扱うべきでもない。むしろ、墓地は現代人の魂にとっての「第三の場所」として機能する。そこでは、人々が自由に心情を吐露し、過去や失われたものと静かに対話し、生命の軌跡から一時的に離脱することができるのである。都市のざわめきの裏側で、墓地は静かに、しかし確かに生者と死者の距離を結び直し、「死」と「生」、それは果たして別物なのかと、問いかけている。



京都見学の旅路で訪れた賀茂別雷神社



細雨のなかの石山寺



港区における墓地と都市空間の並置



自宅近くの墓地広告



自宅近くにある墓地を擁するお寺